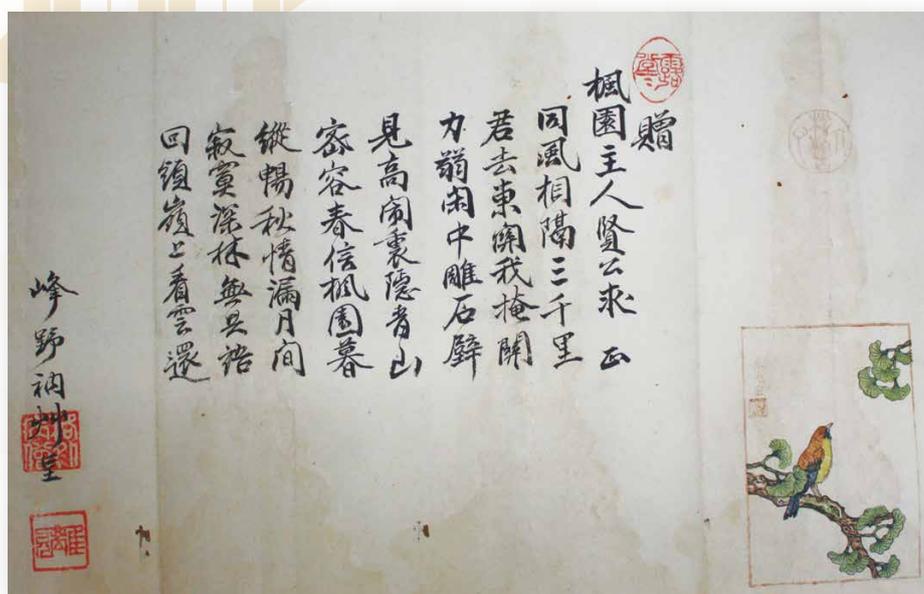


国文研ニュース

No.59 SUMMER 2021



『詩文』

目次

●メッセージ

新館長挨拶……………渡部 泰明 1

●研究ノート

文学・歴史資料論の最前線—理文融合型研究・軍記関連資料論を中心に……………井上 泰至 2

特定研究「近世前期における和刻本仏書の基礎的研究」を終えて……………木村 迪子 3

疱瘡流行に見る江戸時代の感染症対策—美濃国恵那郡加子母村の事例から—……………太田 尚宏 4

●エッセイ

中村古峽旧蔵資料と近代日本草創期の精神医療……………大橋 崇行 6

共同研究の魅力……………福田 安典 8

●トピックス

館長対談企画「一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代」……………山下 則子 10

基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・

活用システム構築に関する研究」資料紹介のYouTube 配信……………西村慎太郎 11

ないじえる芸術共創ラボ—アウトプットイベント2件……………有澤 知世 11

EAJRS/NIJL くずし字ワークショップの開催……………太田 尚宏 13

第44回国際日本文学研究集会……………ディディエ・ダヴァン 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況…………… 14

新館長挨拶

国文学研究資料館長 わたなべ やすあき 渡部 泰明

この四月から、キャンベル館長の後を受けて着任いたしました。

これまで国文学研究資料館に勤務したことはないのですが、思い出深い関わりとして、2006年頃当時在職しておられた田淵句美子教授（現早稲田大学教授）主宰の共同研究に加えていただいたことがあります。時代やジャンルを超えた研究者の方々とのやりとりに目を開かれる思いでした。

いま私の手元に、2005年10月に発行された『国文学研究資料館ニュース』のNo.1があります。すなわちこの『国文研ニュース』創刊号です。館蔵品の写真の下に目次を配する体裁は、いまと少しも変わりません。巻頭には、「国文学研究資料館ニュース発刊に当たって」と題する当時の伊井春樹館長の言葉が掲載されています。1972年の創立以来30余年にわたって、全国の研究者の協力のもとに資料が蓄積されたことへの謝辞が綴られています。それとともに、公募による13の共同研究のプロジェクトが、その前年に開始したことも、「できるだけ多くの国内外の研究者の交流の場にしたい」という願いとともに、強調されています。田淵氏の共同研究も、そうした一つだったこととなります。

この創刊号を拝見すると、当館を研究者に向けてより広く開かれたものにしたいという熱い願いを感じることができます。もちろん、研究者のみが意識されていたわけではありません。巻末には、この年の3月まで館長を務められた松野陽一名誉教授のコラムがあり、そこには、古今和歌集1100年・新古今和歌集800年ということで、館の申請によってこの年発行された記念切手にちなみつつ、古典の「社会的アピール」のために、「具体的で魅力的な研究者からの発言が必要なのだ」、「人材豊富な国文研の現役の皆さんにお願いするしかない」と語られています。

では今の『国文研ニュース』に目を転じましょう。前号のNo.58を見ると、分量的に倍加しているにとどまらず、内容的にも大きな違いを感じます。一言でいえば、「社会」への意識です。「ないじえる芸術共創ラボ」のアウトプットイベントなど、松野氏のいわれる「社会的アピール」にかなり注力されてきていることがわかります。発信だけではなく、「ぶ



らっとこくぶんけん」など社会連携する試みも増えました。なんといってもキャンベル前館長のご功績でしょう。松野氏の願いは大きく花開いたことができます。

一方でまた、No.58には、中本大氏・小秋元段氏のエッセイが掲載されています。期せずして両氏ともに、かつて館によって実施された文献調査ならびに共同研究の記憶について触れておられる。それだけ意義深いものだったことが知られるのです。思えば、今西祐一郎館長時代に始動した大型プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（歴史的典籍 NW 事業）も、「共同研究」の計画を含むものですし、昨年始まった「日本古典籍研究国際コンソーシアム」も、共同研究の場を構築することを大きな柱としています。国文学研究資料館は膨大な文献・史資料を蓄積してきました。それらは利活用されることで輝きを放ち、輝くことでさらに新たな資源の探索を推し進めていくでしょう。歴史的典籍 NW 事業の後継として準備されている「データ駆動による課題解決型人文学の創成」（仮称）は、そうした理念を軸に据えるものです。館の積み重ねてきたこれまでの努力を受け継ぎ、さらに前進させていきたいと思っています。

文学・歴史資料論の最前線—理文融合型研究・軍記関連資料論を中心に

井上 泰至【特定研究(一般)】軍記および関連作品の歴史資料としての活用のための基盤的・学際的研究(研究代表者)、防衛大学校教授

文学・歴史に関する資料の研究は、近年進展が著しい理工学の方法を導入して、大きな変化の節目を迎えつつある。これは世界的な現象だ。資料情報提供のデジタル化・国際化や、理工系の調査方法を資料分析や補修・復元に応用する潮流に端的に顕れてきているが、こうした環境の変化に伴う新しい研究方法の可能性・問題点も同時に焦点化してきている。それは、文学・史学で個別に蓄積してきた知見の垣根を超えるものでもある。

国文学研究資料館の共同研究では、私が代表となって、「軍記および関連作品の歴史資料としての活用のための基盤的・学際的研究」と題して2018年度から3年間、文学・史学双方の研究者の参加をお願いし、軍記とその関連資料を対象に新しい研究法の模索を行ってきた。そこでも浮かび上がってきた大きな柱が、理文融合型の方法と、史学・文学の交差領域である軍記関連資料分析における学際的方法の2点だった。理文融合型研究は、軍記関連資料のような学際性が要求される研究分野こそ一つの突破口になることが明らかになるとともに、文学・歴史をまたぐ研究は、これまで注目されてこなかった分野(合戦絵巻や屏風・兵学・有職学など)を前景化することも見えてきた。

今これらの研究成果を一書にまとめるべく準備中なのだが、この成果報告は、この3年間、本研究の研究会だけでなく、私自身が様々な研究集会への参加を通して知り得た、注目すべき研究動向を紹介すべく集めた論文・報告から構成されている。

研究報告の第一部は、理文融合型研究の可能性と問題点をテーマとする。この問題で新コデコロジーの提唱をされている北海道大学名誉教授石塚晴通先生のご講演を軸に、文学・史学・美術史学から4名の既発表の先端的研究成果を報告して頂き、コメンテーターやフロアからの応答をも反映させる。また関連論文として軍記関連資料に限らず、理文融合型研究の可能性に示唆的な論考もお寄せ頂く予定である。テキストデータベースの構築を前提に地名・人名のクラスター分析を使って、成立時期すら不明の軍記類の位置づけを、一気に解決してしまうような明るい未来が

見えてくると同時に、紙質や絵の具の科学的分析による復元の過程で問題となる、書物のインフラに関するより精密な書誌的情報の必要性など、解決すべき問題点も浮かび上がってきつつある。

第二部は、軍記関連資料の個別論文から成るが、個々の論文あるいは論文相互からは、この分野の学際性に正面から向かい合うことこそが、文学・史学の双方にも新しい可能性を切り拓くことが見えてくる。

一例を挙げれば、江戸兵学者の伝記基礎資料として知られる津山藩兵学者正木輝雄の『兵家系図』(自衛隊第一術科学校参考館鷺見文庫蔵)が、なぜ鳥取藩国学者のコレクション鷺見文庫(九州大学・東洋大学・旧海軍兵学校蔵)に入っているかと言えば、津山から一山越えた米子の国学者連とのネットワークが背景にあることが分かってきた。この現象は広く捉えれば、賀茂真淵に発する国学の中の有職学と兵学との接近、具体的には、有職家の顔も持つ儒者柴野栗山、鉾形蕙斎・谷文晁といった絵師と、それに屋代弘賢・栗原信充(『真書太閤記』の編者)といった文献学者をつなげる、松平定信を核とする十九世紀の「知」の在り方の重要な側面に光を当てることとなる。

文系隣接分野の連携、及び理文の連携の現場の状況を、研究の世界だけでなく、広く文化資源の利用方法へのヒントになるものとして、公刊する予定である。



正木輝雄著・鉾形蕙斎画・柴野栗山序『武器図札』

(国立国会図書館蔵、請求記号：亥二・九三)

DOI : 10/11501/2554292

URL : <https://dl.ndl.go.jp/info.ndljp/pid/2554292/6>

特定研究「近世前期における和刻本仏書の基礎的研究」を終えて

木村 迪子（【特定研究（若手）】近世前期における和刻本仏書の基礎的研究（研究代表者）、日本学術振興会特別研究員 PD）

2019年から2年間、本館共同研究（若手）の助成を受け、「近世前期における和刻本仏書の基礎的研究」を進めてきた。本研究では主に、寛文10年（1670）頃に出版された寛文無刊記書籍目録に記載された和刻本仏書を抽出し、その現存状況を目録化する作業を行った。

今回、私が和刻本仏書を取り上げたのにはいくつかの理由があるが、その第一として、〈和刻本〉そのものに焦点を絞った目録の不在が挙げられる。和刻本とは漢籍を日本において製版・製本して出版したものを言う。原典が漢籍であるがゆえに、和刻本仏書は日本で出版されたにもかかわらず、その大半が『国書総目録』から漏れてしまった。現在では全国漢籍データベースや日本古典籍総合目録データベースに〈漢籍〉の一として和刻本を見出すことが可能である。しかし、これはあくまでも〈漢籍〉としての分類であって、和刻本に限らないという問題を含有する。しかるに、和刻本は単純に漢籍を日本で出版しただけではない。特に仏書に関しては、近世前期、積極的な和刻本仏書の版行があった。出版という最新ツールを得た僧侶たちはその活用に努めていたのだ。和刻本仏書は明らかに近世文学、仏教、思想を考察する上で重要なツールであり、その頒布状況を目録により可視化することは和刻本仏書の有用性を示す上でそれなりの効果を見出せると考えた。

その成果報告として、現在、「寛文無刊記書籍目録所収和刻本仏書目録（仮）」の公開準備を行っている。調査に当たっては、飯野朋美氏（研究分担者・中京大学非常勤講師）・堀部正円氏（研究分担者・日蓮正宗教学研鑽所研鑽員）・万波寿子氏（研究分担者・日本学術振興会特別研究員 RPD）のご助力があった。本来ならば全宗派にわたり作業を完遂する予定だったが、昨年来の新型コロナウイルスの蔓延により、予定していた調査の中断・一部断念を余儀なくされた。順調に進んでいた目録作成を突然の事態に否応なしに終了せねばならないというのは無念である。この状況下では、自由に書誌調査に足を運べた2年前が夢のように感じられる。しかしながら、龍谷大学図書館はじめとする各機関での所蔵古典籍の積極的な画像公開により、少なくない情報を補うことができた。本目録には可能な限り、画像公開に関する情報も付加している。古典籍の画像公開には様々な問題も含まれているかと思うが、住所、

身分、年齢と言った垣根を取り払ってどのような人でも閲覧できるシステムは今後の文学研究の発展においても重要ではないだろうか。こうした取り組みがいっそう進展することを願う。

さてまた本共同研究では年に2回の研究会を行い、仏書研究者同士の交流も進めてきた。研究会では藤本孝一氏（研究分担者・龍谷大学客員教授）に本の装訂に関する指導をお願いした。また、2019年度夏に行った研究会（於

国文学研究資料館）では台湾から陳羿秀氏（研究分担者・静宜大学助理教授）が台湾における日本仏教研究の現状についての報告を、また2019年度冬の研究会（於 龍谷大学図書館）では近世前期の真宗教学が専門の三浦真証氏（研究分担者・龍谷大学非常勤講師）も参加し、活発な話し合いを行うことができた。2020年度はこうした集まりも不可能になってしまったが、幸い、zoom によるオンライン研究会を夏冬の2回、無事に行うことができた。コロナ禍にあって、他の研究者と話をする機会も激減する中で、画面越しではあるが、話ができただことは多くの実りにつながったのではないかな。

長いようで短い2年間の共同研究を終えて色々なことが思い出される。若手研究者にとって、共同研究でのとりまよりの機会は滅多に得られないものだ。日程調整や、予算管理など、全て初めてのことで右往左往するばかりだったが、研究分担者各位、アドバイザーの神作研一氏、そして国文学研究資料館職員各位のあたたかいご支援のもと、無事着地点に立てたこと、関係者各位にこの場を借りて深謝申し上げたい。



2019年12月研究会の様子

疱瘡流行に見る江戸時代の感染症対策—美濃国恵那郡加子母村の事例から—

太田 尚宏 (国文学研究資料館准教授)

1. こくぶんけんカフェ「病と立ち向かう江戸時代の人々」

2020年8月28日・9月4日の両日、こくぶんけんカフェ「病と立ち向かう江戸時代の人々—文学・歴史から学ぶこと—」がオンライン (Zoom) で開催された。新型コロナウイルスの流行・拡大が問題となっている昨今、文学・歴史の中から何か学びとれるものはないか、過去の人々の感染症への気構えや取組みの様子を見てみようという趣旨で行われたものであった。両日は筆者を含めた4名の当館教員が、江戸中～後期の疱瘡の流行と安政5年 (1858) のコレラを題材に、気軽に参加者との会話をする形式で発表・質疑を行った。

小稿では、このときに発表した「〈病〉と向き合う村びとたち—ある山村の日記から—」の内容のうち、疱瘡に関わる部分を中心に紹介することにした。なお、発表内容全体に関しては、ロバート キャンベル編著『日本古典と感染症』¹⁾の中に小文を記したので、ご参照いただければ幸いである。

2. 日記に見る疱瘡対策

時代は、江戸中期の明和9年 (11月に安永元年と改元。1772)、舞台は、木曾御岳南麓に位置する尾張藩領の美濃国恵那郡加子母村 (現在の岐阜県中津川市) という山村である。加子母村など濃州の尾張藩領3か村の「御山守」を務めた内木彦七武久は、非常に筆まめな人物で、毎日の出来事を日記へ詳細に書き綴っていた²⁾。

この年の正月下旬、峠を隔てた隣村の付知村では、疱瘡が猛威を振るっていた。正月20日の彦七の日記を見ると、「又々付知三郎右衛門ニ疱瘡出来之噂之由、万ヶ彦右衛門聒も疱瘡煩出し申噂之よし」とあるように、疱瘡が疑われる患者に関する噂話が伝わってきている。

疱瘡 (天然痘) は、伝染力が非常に強く、死に至る疫病として、古くから人々に恐れられていた。天然痘ウイルスは飛沫により感染し、潜伏期間は7～16日、発症後は高熱と発疹が見られ、致死率が20～50%と高い major 型と1%以下の minor 型があるといわれる³⁾。

付知村で流行した疱瘡は、峠を越えて彦七の住む加子母村へと迫ってきた。こうしたとき、村びとたちがとった行動は、とにかく「逃げる」ことであった。患者から距離をとり、飛沫を浴びないように努める、現在でいうソーシャル・ディスタンスの発想である。

ただし「逃げる」といっても、方法はさまざまであった。その第一は「小屋取建」である。居所と離れたところに掘立小屋を建てて患者を收容する (いわゆる隔離)、あるいは逆に、感染していない者が新たに建てた小屋へと避難する。どちらを選ぶかは、家々の事情によって異なってくるのだろう。日記には、避難した小屋の中でじっと病気の波が過ぎ去るのを待つ様子を「屈ミ居」と表現している。ステイホームで外出をじっと我慢している現代と同じような光景がみられたわけである。なお、隔離された患者に対するケアは、過去に一度罹患して治癒した者があたることになっていた。天然痘にかかる免疫抗体ができて二度と感染しないともいわれるが、当時の人々もこうした点を経験的にわかっていたのかもしれない。

第二の方法は「疱瘡除け」である。この言葉は、疱瘡から逃れるという一般的な意味でも用いられるが、加子母村周辺では、他村または患者が出ていない知人宅へ避難するという意味にも使われた。このときの流行では、付知村の九郎右衛門夫妻が加子母村の中心部にある酒屋の政助宅へ逃げ込んで滞在していたことが確認できる。また、せめて幼い子どもの命だけでも救おうと、親が小児を知人宅へ預ける事例も散見される。こうした場合、預かる側としても、預かった子どもがすでに感染している可能性も考慮して、家内で相談するなど慎重に対応していたようである。

このように感染が拡大した状況になると、自分がすでに感染しているかもしれないという危惧は誰しもが抱くもので、日記の中には、できるだけ人との接触を控える「疱瘡遠慮」という文言も登場する。この言葉はすでに江戸初期からあったようで、幕府の文書にも、疱瘡にか



疱瘡除けの守札

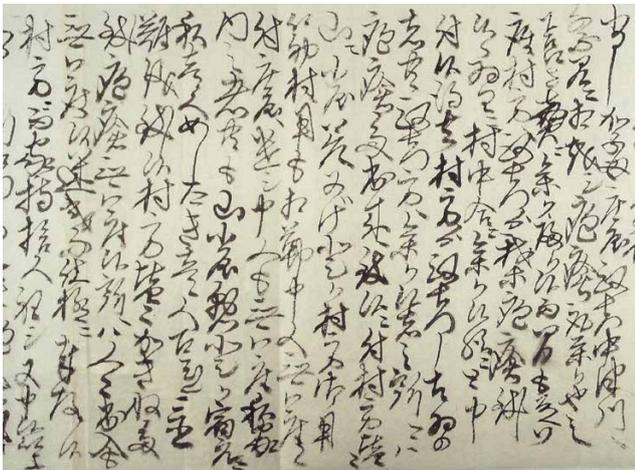
かった将軍や一族を慮って御目見(面会)を辞退するという意味で使われているが、日記に記されている「疱瘡遠慮」はその逆である。自分が感染している可能性を考え、特に自分が上の人に対する面会を遠慮するというニュアンスで使われた。日記を書いた彦七も、祈禱を頼んだ村内の山伏や中山道上松宿の陣屋に駐在する上司のもとへの訪問を「疱瘡遠慮」のためにあきらめて、廻村する商人へ伝言を頼むなどの対応をとっていた。他人を巻きぞえにしないという発想は、現在のマスクの着用なども共通する考え方で、興味深いものがある。

3. 家内壊滅と家の再興

加子母村では、天明3年(1783)にも秋から冬にかけて疱瘡が大流行し、村が壊滅的な打撃を受ける事態に陥った。

この年の疱瘡は、加子母村の庄屋が中津川へ祭礼見物に赴いたときに感染し、村へ運ばれてきたものであった。村に帰って疱瘡に感染したと思った庄屋は、平癒を願って疱瘡神を祀り、祝いの行事のために村中の親しい人たちを呼び集めてしまった。この集まりが、二次感染を引き起こす引き金となり、疱瘡が隣く間に村じゅうへと広がっていったのである。

村方皆々山二小屋差にげ登り、村方御用筋・村用も相勤申人無御座候付、庄屋へ遣シ申人も無御座、私家内之者共も山小屋懸登り、宿元ニ私壺人、めしたき壺人召連置、難儀致し候、村方皆々かきね多致し、疱瘡無御座候所へ八人々出入も無御座候、迷惑至極ニ奉存候、村方ニ而家持拾人程シに申候、以上



内木善右衛門の書簡(部分)

これは、天明3年12月11日付で彦七の長男善右衛門が尾張藩材木方の上司へあてて出した書簡の一部である⁴⁾。村内に拡散された疱瘡から逃れようと、多くの村びとたちが山小屋をつくって避難したと記されている。これにより村政は完全に麻痺し、また、善右衛門の家族もみな山小屋へ逃げたので、自分と飯炊きの者しか家に残っておらず、非常に難儀している苦境を訴えている。なお、すでにこの時点で、村内の家持10人が死亡したとも記されている。

当時の疫病は、外から邪気が体内に入り込んで感染すると考えられていたので、村びとたちは、家の周りに垣根をたくさん築いて、邪気の侵入を阻もうとする一方、「疱瘡無御座候所へ八人々出入も無御座候」とあるように、自分がすでに感染していた場合のことを考え、他人へうつさないよう、患者が出ていない家へ行かないようにするなど、気を配っていた様子もうかがわれる。

このときの疱瘡では、彦七の一族にも罹患者が出ており、次男武助が興した分家「桑野屋」では、子どもたちを残して大人はすべて死去したという⁵⁾。子どもたちだけが生き残ったのは、おそらく「疱瘡除け」で他村などへ預けていたためではないかと思われる。

武助の長男団蔵が、潰れた「桑野屋」を再興するために村へ戻ってきたのは、時が下った寛政7年(1795)12月のことであった。分家の再興にあたって、本家の彦七家では、同じように寛政元年(1789)の疱瘡で潰れ家同然になってしまった善右衛門の妻おいくの実家「かぢや」から、生き残ったおいくの妹のおろくを呼び寄せて団蔵の後見人に付けている。疱瘡で甚大な被害を受け、かろうじて助かった「桑野屋」「かぢや」両家の人々が、一つの家に集まって、新たな生活基盤を築いていったことがわかるのである。

1) ロバート キャンベル編著『日本古典と感染症』(角川ソフィア文庫、2021年)。

2) 内木家文書「御山方御用并諸事日記」全9冊(宝暦13年～安永4年、内木哲朗家・徳川林政史研究所所蔵)。

3) 国立感染症研究所ホームページ(2021年5月21日)

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/445-smallpox-intro.html>

4) 内木家文書 B12-5-11(内木哲朗氏所蔵)。

5) 内木家文書「末代調宝記」(内木哲朗氏所蔵)。

中村古峡旧蔵資料と近代日本草創期の精神医療

大橋 崇行（国文学研究資料館学術資料委員会委員、成蹊大学文学部日本文学科准教授）

現在、愛知淑徳大学の竹内瑞穂准教授を研究代表者とする科研費プロジェクト「中村古峡 資料群と近代の〈異常心理〉に関する総合的研究」（19H01234）に、研究分担者として参加しています。このプロジェクトでは、千葉県千葉市にある中村古峡記念病院が所蔵する中村古峡旧蔵資料についての調査収集を行うとともに、資料の具体的な内容についての研究も進めています。またその中で、調査収集を行った資料については、国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースにおいて書誌情報を公開できるよう、準備を進めているところです。

中村古峡は、旧制第一高等学校を卒業後、1903（明治36）年に東京帝国大学文科大学文学科（英吉利文学専修）に入学し、同年にイギリスから帰国して講師となっていた夏目漱石の講義を受講しています。第一高等学校の在籍中から同人誌で小説を書くなど文学に傾倒し、1906（明治39）年、25歳のころから、漱石の自宅に出入りするようになりました。卒業後は東京朝日新聞社に入職し、漱石の弟子として金銭的な援助を受けたり、漱石の推薦で「回想」（『東京朝日新聞』、1908（明治41）年9月10日～12月2日）や、「殻」（『東京朝日新聞』、1912（明治45・大正元）年7月26日～12月5日）などを発表したりしています。

一方で、1917（大正6）年、36歳のときに品川区御殿山にあった自宅で日本精神医学会を設立して神経性疾患の治療を始め、雑誌『変態心理』を創刊しました。その後、40代に入ってから東京医学専門学校（現在の、東京医科大学）、千葉医科大学（現在の千葉大学医学部）などで本格的に精神医療を学び、1941（昭和16）年、60歳のときに名古屋医科大学（現在の名古屋大学医学部）で医学博士を授与されています。現在の中村古峡記念病院は千葉医大の精神科に入局していた1929（昭和4）年にこの付近で民家を借りて治療を始めたのをきっかけに、1934（昭和9）年に完成した中村古峡診療所が開院された場所の付近となっています。

中村古峡の経歴や業績については、『変態心理』復刻版の刊行に際して別巻解説書として編まれた小田晋ほか編『『変態心理』と中村古峡』（不二出版、2001年）にまとめられています。また、早くから曾根博義先生が、特に夏目漱石との関わりという視点から研究を始められていました。その中で中村古峡旧蔵資料についても調査をされており、曾根先生が調査をされたおよそ700点の図書については、中村古峡記念病院の書庫にあるガラス扉付きの書架に別置

されています。これらは主に、中村古峡自身の著作、夏目漱石や古峡の親友だった生田長江から贈られた署名入り本などであり、その一部は2016（平成28）年2月3日から3月13日にかけて和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館で開催された展示「第43回月例展 熊楠とゆかりの人びと第26回 中村古峡」でも公開されました。

また、中原中也が中村古峡診療所で精神医療を受けていたときに記していた「療養日誌」も、この調査の中で発見されたものだと思います。この日誌は、『中原中也記念館館報』第8号（2003（平成15）年3月）で紹介されているとおり、現在は中原中也記念館に移管されています。この他、中村古峡の代表作である『二重人格の女』（1937（昭和12）年）で症例として報告された、解離性同一性障害を抱えた女性である坂まさ子（仮称）とのやりとりなども、このときに整理されています。

しかし、特に文学に関わるものを中心に行われた当時の調査は、すべての資料の整理を終える前に中絶していました。今回の科研プロジェクトでは、これらの悉皆調査によって中村古峡旧蔵資料の全体像を明らかにするとともに、その一部をデジタル画像資料としても保存し、病院に提供することもめざしています。

資料群の概要については、2019（令和元）年11月24日の日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会合同国際研究集会で行ったパネル発表「中村古峡資料群を読む 近代日本の〈異常心理〉文化の再考に向けて」で、すでに報告をしています。中村古峡旧蔵の図書および雑誌約2700点、中村古峡宛書翰および葉書約1600点、「療養日誌」約580点の他、写真、釣り道具、日用品などの中村古峡遺品、日本精神医学会関連資料、中村古峡診療所の設立に関する資料、そして中村古峡の日誌によって構成されています。

国文学研究資料館の調査収集事業は、現在、主に個人蔵の資料を中心に進められています。そのため、館の調査収集事業として中村古峡旧蔵資料の調査を行うことも可能かもしれませんが、資料の大半が昭和初期のものであることもあり、調査先として提案することはせず、館には国文研の青田寿美先生を通じて情報のみを提供するという形になりました。一方で、この研究が科研プロジェクトとして進められていることで、日本文学研究、特に国文学研究資料館が担っている日本文学研究における資料の調査収集について考えていく上で、さまざまなヒントが得られているよ

うに思います。

第一に、中村古峡旧蔵資料のような近代以降の資料に関しても、国文学研究資料館で行われてきた古典籍の調査収集の方法が、きわめて有効に機能するという点です。たとえば「療養日誌」は、中原中也のもののような市販のノートその他、紙綴で仮製本にした冊子体で残されています。こうした資料を整理していく上では、国文学研究資料館の調査カードの記述方法が、非常に参考になっています。

近代以降の研究ではどうしても作家の肉筆原稿や草稿、活字化され、メディアを通じて発信される資料に目が向いてしまうことが多くなっています。しかし、文学以外のものも含め、近代以降資料は、国内に数限りなく存在しています。今回のプロジェクトは日本の草創期における精神医療に関する資料ですが、こうした資料の調査収集を行って後世に残していくことは、今後の近代文学や歴史学の研究に限らず、さまざまな学問領域においてより重要になっていくでしょう。このときに、国文学研究資料館が行ってきたような調査収集の枠組みは、きわめて重要になってきます。

第二に、こうした資料の調査収集を、学際的な研究とどのように結び付けていくかという点です。

「療養日誌」から明らかになるのは、中村古峡が森田正馬^{もりたまさたけ}のいわゆる森田療法を、少なからず取り入れていたということです。その中で、森田療法の特徴とも言える作業療法の四段階（「臥褥期」「軽作業期」「作業期」「社会復帰期」）を中村古峡なりにアレンジを加えて行いつつ、特に「療養日誌」によって医師と患者とが文章でコミュニケーションを取りながら治療の状況を綿密に確認していくこと、また、患者の状況を言葉として記述させることそのものが治療の一環になっていることなどに、中村古峡による治療の特徴が見られます。

森田療法の研究については、日本森田療法学会を中心に、非常に多くの蓄積があります。その中で、中山和彦先生や藤田裕司先生によって、中村古峡の森田療法との関わりについてはすでに言及がなされてきました。一方で、それでは中村古峡による治療がどのように形作られたのかについて考えるためには、「療養日誌」と中村古峡所蔵資料の中にある医学書とを突き合わせて、「療養日誌」の枠組みがどのように編成されていったのかを見ていく必要があります。この部分については、近年の近代文学研究が行ってきた言説研究の方法によって分析し、医学史の知見と併せて

いくことで、従来の研究をより精緻にしていくことができるように思います。

そして第三に、本研究のような調査収集と学際的な研究を、どのように文学研究に引き戻していくかという点です。

この問題について考えるためには、今後、より詳細にテキストとしての「療養日誌」を検討していく必要があります。そのためあくまで目測ではありますが、中村古峡の治療における言葉を介したコミュニケーションのあり方そのものに、同時代の医療とは異なり、中村古峡がもともとは文学に携わっていたからこそ入り込んでいる特性が見られるのではないかと考えています。もしそうだとすれば、同時代の医療で用いられていた言葉との差異から、文学における言葉とはどのようなものであるのかという問題にも結び付けていくことができるかもしれません。

資料の調査収集、およびその読解は、文学研究の根幹の一つと言えるでしょう。今回のプロジェクトでは、近代以降の資料でもこうした研究を行う余地が非常に多く残されていること、そして、この領域において文学研究が学際性を高く発揮できることが明らかになりつつあるという意味で、非常に意義深いものになっているように思います。

国文学研究資料館の調査収集事業は年々規模を縮小してきており、特にCOVID-19の影響で、2020年度はほとんど実施することができない状況になったと伺っています。しかし、私がこうした研究プロジェクトに参加し、資料の調査収集に協力することができるのは、総合研究大学院大学の日本文学研究専攻で資料の調査収集の方法を学んできたからこそだと思います。

調査収集の方法は、実際に資料の現物に触れていくことで初めて身に付くものです。事業が縮小するということは、調査収集ができる大学院生や、次世代の研究者を育てていくことができないという事態を招きます。そうした事態を回避し、調査収集の方法を受け継いで次の新しい文学研究を生み出していくためにも、国文学研究資料館の調査収集事業がふたたび活発にできることが来ることを、強く願っています。

共同研究の魅力

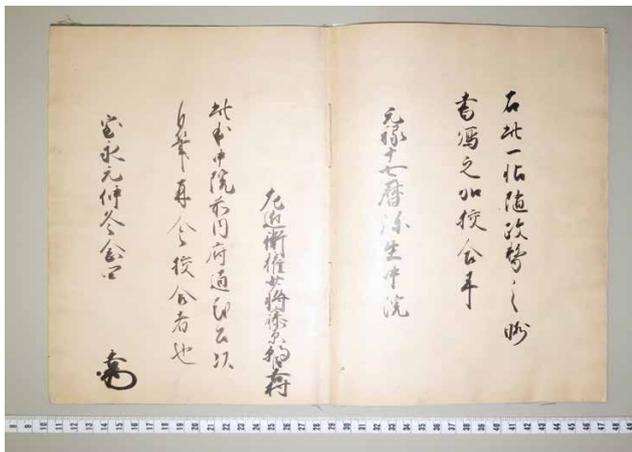
福田 安典（国文学研究資料館共同研究委員会委員、日本女子大学文学部教授）

国文学研究資料館の共同研究には本当にお世話になりました。共同研究には基幹研究、公募研究、特定研究などがあり、そのいくつかに入れていただきました。

「学芸書としての中世類題集の研究 - 『夫木和歌抄』を中心に -」（研究代表者、田渕久美子先生・寺島恒世先生、研究期間：平成16年度～21年度）は、たまたま当時勤務していた愛媛大学の鈴鹿文庫に西順自筆の『夫木和歌抄抜書』があり、その縁からお声をかけていただいたものです。話が長くなりますが、私は平賀源内を中心とした近世期の文芸を専門としています。中国白話小説の翻案を契機に生まれた新小説ジャンルは「読本」と呼ばれ、その第一作品は都賀庭鐘『英草紙』ですが、庭鐘は源内と同じ文化圏にいたと思われ、『英草紙』にも関心がありました。その巻頭話が『夫木和歌抄』をめぐるストーリーなので、いつかの歌集に取り組みねばと考えていたのですが、和歌は専門外、まして中世となるとおいそれとは挑戦できないと思っていました。ところが、たまたま赴任先（愛媛大学）に西順自筆本はあるし、共同研究のメンバーは中世和歌に精通していらっしゃる方ばかりなので、喜んで共同研究に参加しました。その結果は『夫木和歌抄 編纂と享受』（風間書房）として公刊され、私自身は大いに蒙を啓かれました。

「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」（研究代表者、寺島恒世先生、研究期間：平成25年度～27年度）は、研究代表者が「既に陳腐ともいえるこのテーマ」とおっしゃっ

ておりましたが、その実、東日本大震災という未曾有の災害のために「地方消滅」の危機が取り沙汰されていた背景があります。古典籍を含む文化遺産は中央だけではなく、地方にも多く遺されており、その保存や研究のために国文学研究資料館が旗振り役となり、専門やジャンルを超えた多くの共同研究者に呼びかけて立ち向かおうという熱い思いが根底にあるプロジェクトでした。私はこの共同研究に愛媛の立場から参加しました。特に宇和島の伊達家所蔵の古典籍を中心としたものです。宇和島は伊達政宗の長男秀宗が入部してより廃藩に至るまで九代、伊達家が続ききました。秀宗は長男であったのですが豊臣秀吉の養子となっていたので仙台ではなく宇和島藩主となりました。伊達家は文化、文芸に通じた家で、その気風は宇和島、仙台ともに遣りました。特に仙台藩五代藩主の吉村は文人大名として知られています。その吉村の娘を母に持つのが村候で宇和島藩の中興の祖ともいわれています。そのため、連歌、俳諧、和歌、能楽、歌舞伎、香道の資料が多く宇和島には現存しています。『大海集』『詞林金玉集』を編集した桑折宗臣や穂積重麿（鈴木重麿）・重樹父子、「鉄道唱歌」で有名な大和田建樹は宇和島から輩出されました。他に小澤種春、本間游清、淡々門の高月狸兎、椎本流の谷脇恩竹などのユニークな作家もいます。目を蘭学に転じれば、八代目藩主宗城は外様大名でありながら幕末四賢侯と呼ばれ、蘭学の造詣が深い人です。高野長英、シーボルトの弟子の二宮敬作を重用し、大村益次郎を招聘して宇和島藩の蘭学教授に据えました。注目すべき文事に長じた藩です。



伊達吉村自筆の『詠歌大概』（日本女子大学蔵）



元治三年刊、一荷堂半水作、長谷川貞信画
『に○か種袋 三編』（個人蔵）

その中から能楽について小林健二先生や岩城賢太郎先生がワークショップの企画をされたり、愛媛大学関係者の伊井春樹先生、三浦和尚先生、神楽岡幼子先生、小助川元太先生らと宇和島城築城四百年を記念としたシンポジウムを開催できたことはいい思い出です。通常のシンポジウムは立川の国文学研究資料館で開催されることが多いですが、遠く離れた愛媛の地で開催されたこと、まさに寺島先生の提唱された日本文学の新たなステージをまざまざと感じました。

以上の二つの共同研究はいずれも私の専門ではない領域の研究という共通点があります。そしてそのことが共同研究の魅力なのだと思います。私の怠惰な力量不足はひとまず棚に上げておきますが、日本文学の研究者はどうしても自分の専門の殻を作りがちです。特に中堅になると日々の業務の多忙さもあり、新しいことへのチャレンジに二の足を踏んでしまいます。私は、この二つの共同研究に入れていただいたおかげで、本当に研究の幅が広がり、日本文学研究の楽しさを再確認できました。和歌などは扱うとは思わなかった自分が、伊達吉村自筆の『詠歌大概』(図版、日本女子大学蔵)を先のシンポジウムにあわせて愛媛新聞で紹介することがあろうとは夢にも想像していませんでした。

「近世風俗文化の形成－忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺－」(研究代表者、飯倉洋一先生、研究期間：平成20年度～22年度)は違う意味で共同研究の魅力を教えてくれました。これは国文学研究資料館と大阪大学大学院文学研究科との研究連携事業です。大阪大学には忍頂寺以下、忍頂寺文庫と小野文庫という江戸書物のコレクションがあります。『清元研究』(春陽堂、昭和五年刊)の著述で知られる淡路の名家出身の忍頂寺務(1886-1951)が集めた近世歌謡、洒落本を中心としたコレクションで、務の死後に阪大に入った一群を忍頂寺文庫、その後に遺族の手元に遺っていたものが小野文庫です。早くに国文学研究資料館の調査が入り、よく活用された資料群ですが、肝心の忍頂寺務の伝記がわかりませんでした。その現状に対して国文学研究資料館と大阪大学大学院文学研究科が「近世風俗文化の形成」というキーワードのもとに共同研究会を立ち

上げ、悉皆調査と研究を推進し、数冊の研究報告書を公刊できました。その過程で忍頂寺務さんの御子孫とも出会い、資料を調査させていただけるというサプライズもあり、とても充実した共同研究となり、なんとか評伝をまとめられました。先の二つの共同研究とは違い、この忍頂寺務旧蔵書については私は大学時代から取り組んでいますが、歌謡や洒落本に加えて淡路資料、俳諧、団十郎、漢詩など多岐に広がるこの文庫は私一人の手に負えるものではなく、共同研究がなければ忍頂寺文庫の実態解明にはたどり着けなかったと正直に告白します。一例をあげますと、忍頂寺文庫には上方の三ツ切本の可愛い本が多量にあります(図版は、元治三年刊、一荷堂半水作、長谷川貞信画『に〇か種袋 三編』、個人蔵)。資料館の共同研究を通してこのような特殊なジャンルの本にも関心の幅が広がっています。

このように私にとっての共同研究というのは、雅俗の振れ幅の広い未知の世界へ自分を引っ張り上げ刺激あるチャンスを与えるもの、自分一人では決してたどり着けない研究の終着地へメンバーの学恩を得て到達しえるものです。その経験を踏まえて、今後も資料館の共同研究に期待しますし、多くの若い方々が参加されることを勧めたいと思います。

さしあたっては本年度に実施される木藤才蔵文庫の共同研究、少しお手伝いさせていただきますが、とても楽しみにしています。

館長対談企画「一冊対談集 クリエーターと語るこの国の古典と現代」

第6回 ファッションデザイナー森永邦彦氏

2021年1月29日(金)18時より、くにたち市民芸術小ホールにて、森永邦彦氏とキャンベル館長(現 当館名誉教授)との対談が行われました。コロナ流行下のため入場者数を制限しての開催で、すぐに参加希望者は定員に達しました。国立市ご出身の森永氏は、アパレルブランドANREALAGE(アンリアルエイジ、日常・非日常・時代をミックスした造語)のデザイナーで、「神は細部に宿る」という信念に基づいた鮮やかで細かいパッチワークの服や、ファッションにおける境界(サイズや男女や日常非日常など)の越境を目指し、最近ドバイ万博日本館の斬新な制服デザインで話題になりました。舞台上には、森永氏の「視覚の常識を覆す服」や「季節や光で色が変わる服」が数多く配置され、クリエイティブで先進的な世界になっていました。ドバイ万博日本館の男女の区別のない制服が、光が当たると様々な色に発色する様子を見せて頂き、服の概念そのものをゆるがす、再構築していく〈変換〉—Transformation—に、氏が強い関心を寄せているお話などを伺いました。

キャンベル館長が提示した日本古典籍は、江戸時代の重ねの色見本帳『薄様色目』や、「はぼうき(羽箒)」という木や「ちりとり」という鳥が描かれこじつけの説明がされる見立絵本『見立百化鳥』と、見立絵本が基づいた、花鳥が漢詩や発句とともに描かれる絵本『画図百花鳥』、歌川広重画の浮世絵「東海道五十三次」を鉢山(鉢の上に盆栽のように盛って創る)にしたものを描いた絵本『東海道五十三次 鉢山図会』と、それを元に現代の「情景王」こと山田卓司氏が創作したジオラマなど、既成概念を越境したり、立体と平面の境を越える世界が古典籍にもあることを示していました。文系ご出身の森永氏は、これらの古典籍を食い入るように手に取って御覧になり、深い興味を示されていました。

来るべき未来を見据えた刺激的な対談は瞬く間に終了してしまい、観客の皆様は立ち去るのも残り惜しげに、いつまでも森永氏と館長を囲んでいました。



第7回 ないじえる AIR 山村浩二氏

2021年2月6日(土)15時より、国文学研究資料館にて、山村浩二氏とキャンベル館長との対談および山村氏の新作アニメーション『ゆめみのえ』の上演が行われました。コロナウイルス流行の折から、ライブ配信の形式を取りました。東京芸術大学教授の山村浩二氏は、代表作『頭山』、『カフカ 田舎医者』等で世界5大アニメーションフェスティバル全てでグランプリを獲得、『おやおや、おやさ』などの絵本作家としても活躍され、2019年に紫綬褒章を受賞されたアニメーション作家です。国文研のAIR(アーティスト・イン・レジデンス)として、2017年度より国文研に一定期間滞在され、創作活動を行って頂きました。木越准教授や有澤特任助教(現 神戸大学助教)達と様々な古典籍に触れるうち、山村氏が最も興味を持たれたのは、蕙斎の絵手本『略画式』シリーズでした。そして山村氏が愛する上田秋成の読本『雨月物語』「夢心の鯉魚」の主人公興義を蕙斎とした『ゆめみのえ』を、蕙斎画『略画式』そのままの筆致でアニメーションにしたのです。簡単そうに見える『略画式』の絵ですが、その筆遣いは実に巧妙で、山村氏は蕙斎の筆致を獲得するために徹底的に模写を繰り返したそうです。

当日は蕙斎画『略画式』を実際に山村氏が模写するパフォーマンスもあり、動画視聴回数は5,000回を超えました。キャンベル館長は『略画式』に影響を与えた、森島中良作『紅毛雑話』の身体描画を紹介し、木越准教授は古典籍における絵と文字の関係を、黄表紙を例に語り合いました。山村氏のご厚意により全編上演した『ゆめみのえ』は、ないじえる芸術共創ラボ展「時の束を披く—古典籍からうまれるアートと翻訳—」でも公開され、日本語版と英語版があります。最優秀国際アニメーション短編映画賞等多くの受賞をされました。チャット機能を活用し、視聴者の質問に回答する双方向のライブ配信で、和気藹々とした対談は予定時間を大幅に過ぎてしまいましたが、名残は尽きませんでした。(山下 則子)



基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」資料紹介の YouTube 配信

2019年度からスタートした基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」では、その研究目的として「地域住民が自立的に地域アーカイブズを継承・活用し、研究者がそれをサポートし、さらにその過程から研究者が新たな学術的研究課題を追求するという協創関係を構築」するということを掲げました。簡単に言えば、地域住民・自治体・研究者が一体となって地域に遺されたアーカイブズ（古文書・古典籍や行政文書をはじめとしたあらゆる紙媒体の歴史資料）を大切に遺すことを推進し、その活動や人びととのつながりの中から新しい研究課題を見つけ出すというものです。そして、具体例として、当館が約5万5千点を収蔵する松代真田家文書のふるさとである長野県長野市を対象としました。

この研究では地域住民の方や博物館・文書館・図書館などとのイベントを多く企画しており、2019年12月には長野市立博物館や真田宝物館学芸員とともに、長野県内の古文書に関心の高い27名の地域住民の皆さんが当館を訪れ、一緒に歴史資料を学ぶ機会がありました。しかし、2019年度末から新型コロナウイルス感染拡大防止のため、大規模なイベントができなくなってしまい、折角の「地方協創」というスタイルが壊れかけてしまいました。そこで、地域住民や自治体、国文研との紐帯を途切れさせないために、当館蔵の真田家文書・八田家文書など松代藩領域の古文書の資料紹介を週に1度 YouTube で配信することにしました。QR コードか以下のアドレスでご覧ください。https://www.nijl.ac.jp/activity/research/joint_research/post_46.html



この資料紹介は2021年6月1日現在で45回の配信を行い、また、2020年11月17日には長野市松代町で開催した「はじめての古文書講座 - 松代の古文書と歴史を学ぶ -」でも紹介をすることによって大きな反響を頂きました。

新型コロナウイルスの問題がまだまだ続いており、この研究が目指していたスタイルを進めることができていないのがもどかしいですが、「ウイズ・コロナ」社会を踏まえれば、研究者が YouTube などの媒体を用いて社会に還元するというスタイルは大きな意味を持つかもしれません。
(西村 慎太郎)

ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント 2件

国文学研究資料館では2017年度10月より「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」を進めており、アーティスト等を招聘し、古典籍を活用して新たな芸術的価値を創出するレジデンス・プログラムを実施しています。レジデンス・プログラムは、様々な分野で活躍するクリエイターを招き、古典籍に触れたり研究者とワークショップを行ったりすることで得た感性と知識を創作活動に活かしてもらうアーティスト・イン・レジデンス (AIR) と、翻訳家を招き、まだ広く知られていない古典文学作品について研究者とともに理解を深め、他言語に翻訳して世界に発信してもらうトランスレーター・イン・レジデンス (TIR) の2つの柱があります。2020年度の活動の一部をご紹介します。

梁亜旋展「Inheriting and recreating the classics」開催

現代芸術家の梁亜旋さんの個展を、東京都千代田区文房堂ギャラリーにて開催しました(2021年1月18日～23日)。

会場では、当館所蔵の絵巻「百鬼夜行図」をモチーフにした絵画作品「Ghostly」シリーズや、絵巻・絵本に描かれたさまざまな顔をタグで検索することができるデータベース「顔貌コレクション」を駆使した「FUNNY FACES」シリーズ、絵巻等に見られる異時同図法やすやり霞といった画面処理法を3Dで表現した「A Mountain」などを展示しました。

また会期中には、「顔貌コレクション」で「面白い顔」を探してカラフルなお面をつくるワークショップ「古典籍の“面白い顔”が仮面になる！」をWEBで配信し、世界中どこからでも古典籍を楽しむことのできる方法を提案しました。この動画は、国文研 YouTube チャンネルで公開しています。



梁亜旋展会場の様子



ワークショップ「古典籍の“面白い顔”が仮面になる！」の様子。手前から梁さん、筆者

「ないじえる芸術共創ラボ展 時の束を抜く ―古典籍からうまれるアートと翻訳―」開催

誰にでもひらかれた歴史的な文化資源である日本の古典籍を、もっと多くの方に自由な発想で活用していただきたいという想いで活動している「ないじえる芸術共創ラボ」の、約3年半にわたる道のりと成果を一堂に会した「ないじえる芸術共創ラボ展 時の束を抜く」が、国文学研究資料館展示室にて開催中です（2021年2月15日～5月31日）。

この展示では、世界の第一線で活躍するクリエイターたち（AIR5名・TIR1名・ゲストアーティスト1名・1組）と、当館教員をはじめとするさまざまな分野の研究者とが、ともに古典籍をひらき、その魅力を探求してゆこうとする実験の過程で起こった〈化学反応〉をご覧ください。

以下、順路に沿って主な展示品をご紹介します。

- 梁亜旋氏（現代芸術家）コーナー：「百鬼夜行図」をモチーフにしたインスタレーション作品「Ghostly」、聖山巡礼をテーマにした「A Mountain」、絵巻からインスパイアされた作品5点と、絵巻「うらしま」（貴重書）、「ふんしやう」（貴重書）など。
- 長塚圭史氏（劇作家・演出家・俳優）コーナー：長塚氏による書き下ろし戯曲「KYODEN'S WOMAN」公演のドキュメンタリー映像と、「手拭合」（貴重書）をはじめとする、江戸後期の戯作者・山東京伝の多彩な作品群。
- 山村浩二氏（アニメーション作家）コーナー：短編アニメーション作品「ゆめみのえ」（日本語版・英語字幕）と、その原画やスケッチ、作品のモチーフになった読本『雨月物語』（貴重書）や絵手本『略画式』シリーズ等。
- WOW（ビジュアルデザインスタジオ／ゲストアーティスト）コーナー：展示会のコンセプトを表現するイメージ映像「知の旅」を、特設スクリーンで上映。「知の旅」は、本展示会に出展中の『伊勢物語』や『江都名所図会』をモチーフにした臨場感ある作品。
- 松平莉奈氏（画家）コーナー：黄表紙（江戸時代に出版された大人向け絵本）の始祖『金々先生栄花夢』（貴重書）と、その物語の舞台を現代の東京に置き換えた松平氏の新作「金々先生 夢の TOKYO REMIX」シリーズ等。
- 山田卓司氏（情景作家／ゲストアーティスト）コーナー：鉢の中に小さな景色を作る「鉢山」のスタイルで、東海道五十三次を描いた絵本『東海道五十三駅 鉢山図絵』と、それをもとにしたジオラマ作品三点（日本橋・池鯉鮒・京三条）等。
- ピーター・J・マクミラン氏（翻訳家）コーナー：扇型のなかに描かれた絵と、その周りに配された和歌の関係を読み解く作品群「扇の草紙」（3点、うち2点は貴重書）と、マクミラン氏による「扇の草紙」翻訳を活用したデジタルコンテンツ「Found in Translation」（凸版印刷（株）制作）等。
- 川上弘美氏（小説家）コーナー：「伊勢物語」をモチーフにした現代恋愛小説『三度目の恋』（中央公論新社）の推敲の跡がうかがえる校正原稿や、当館が誇る鉄心斎文庫のなかから、「伊勢物語」の華麗な屏風、絵巻や写本等（いずれも貴重書）。

展示品の画像や詳細な解説、また、クリエイターと研究者の共創の道のり等が収録された図録（144頁・フルカラー・無料）は、展示会の特設ページから無料でダウンロードしていただけます。

また、ロバート キャンベル館長と古典インテプリタの有澤知世特任助教（いずれも2020年2月当時）によるバーチャルギャラリーツアー動画も特設ページで公開しています。360度カメラを駆使したこの映像は、スマホやPCの画面上で会場内を自由に見渡しながら、解説を聴くことができます。

クリエイターたちが、古典籍を発想の源として創作した素晴らしい作品世界をじっくりとご覧いただきながら、彼らが発想へ至るまでに様々な影響を及ぼした古典籍をも鑑賞し、創作の過程や、日本の古典がもつ大きな可能性をお楽しみください。

（神戸大学人文学研究科助教 有澤 知世）



「時の束を抜く」会場の様子



バーチャルギャラリーツアーを案内する
ロバート キャンベル館長（当時）と筆者

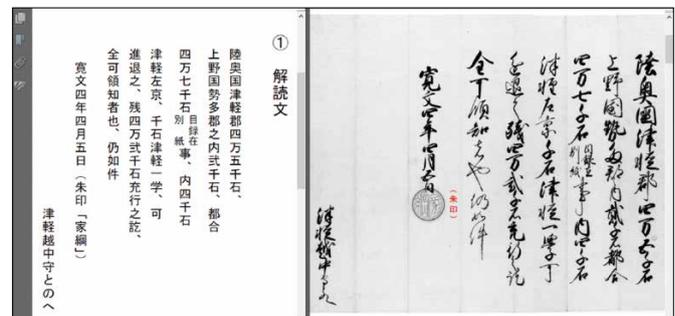
EAJRS / NIJL くずし字ワークショップの開催

2021年4月21日(水)から23日(金)までの3日間、オンライン(Zoom)でEAJRS/NIJL くずし字ワークショップが開催されました。EAJRSは日本資料専門家欧州協会の略称で、ヨーロッパ各国の図書館・博物館・美術館などで日本資料を取り扱う専門職の方々の集まりです。このワークショップは、EAJRSと当館との学术交流協定に基づいて毎年実施されているものですが、新型コロナウイルスの影響によりノルウェーのオスロで開催予定だった今回は中止となり、今回もオンラインでの開催となりました。

当日の受講者は28名で、イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・アイルランド・スイス・ノルウェー・ロシアなど多くの国々からの参加がありました。講師は、当館の山本和明教授(古典籍)と太田尚宏准教授(古文書)が担当し、くずし字の初歩から始まり、古典籍では絵本、幕末・明治の戯作、浮世絵、料理本などのさまざまな書物を、古文書では武家文書を素材にして講義を行いました。両講師とも図書館などの現場で役立つ話や情報提供を意識したこともあり、終了後のアンケートでは、期待通りあるいは期待以上の成果が得られたとの回答が多数を占めました。一方で、オンラインで行う演習の方法など、いくつかの課題も浮きぼりとなりました。今後もこれらの改善に努めながらワークショップを実りあるものにしていきたいと思えます。(太田 尚宏)



古典籍のくずし字解説教材



画面上に2つの図版を並べて解説

第44回国際日本文学研究集会

2021年5月8日(土)・9日(日)に、色々な面で例年と異なった形で第44回国際日本文学研究集会が開かれました。新型コロナウイルス感染対策のため、オンラインのみの開催になって、のべ160名が参加されました。休み時間での発表者と聴者の交流が出来なかったのは残念であった一方、様々な時間帯からの参加者が集った事はオンラインなりの利点も見られました。また、毎回の事ではありますが、発表のテーマ、研究方法、着目点などは世界の様々なアプローチを反映して、活発な質疑も広げられて、今年も真正正銘の国際日本文学研究集会になりました。

オンライン化の他に、本会から2点の変更がありました。まず開催時期ですが、今までの11月前半から5月上旬に開くようになりました。その主な理由としては、今までの秋開催で応募できない留学期間が1、2年の学生への配慮です。時期を移動することによって、秋に新学期が始まる留学生も日本在住の学生や研究者も参加し易くなりました。

そして、会の形体も少し進化して、前回までに「研究発表」、「ショートセッション」と「ポスター」という三枠が設けられていたことに対して、本会から「研究発表」と「ポスターセッション」の二枠のみになりました。本会を振り返ると、オンラインという厳しい状況にも関わらず発表者と参加者のおかげで有意義な会になりました。今後も国内外の若手研究者のみならず、ベテランの学者にもこの国際日本文学研究集会が研究交流の貴重な場であり続けると感じさせられました。(ディディエ・ダヴァン)



オンライン開催の舞台裏

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

大友一雄教授と山下則子教授による最終講義 令和2年度特別講義をオンラインで開催

2021年3月16日(火)、令和2年度特別講義をオンラインで開催しました。講師を務めた日本文学研究専攻の大友一雄教授と山下則子教授は、3月で定年退職を迎え、今回が最終講義となりました。

大友教授は「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料群の構造とデータベース構築」のテーマで、2011年にローマ教皇庁バチカン図書館で発見されたキリシタン禁制に関する歴史的史料の調査と研究のため発足した「マレガ・プロジェクト」の歩みを解説。調査体制の構築から、資料の現状記録、修復、資料のデジタル画像化の各過程を多くの資料写真や国内外での研究の様子を記録した写真とともに紹介しました。聴講者は、バチカン図書館と人間文化研究機構をはじめ、国内外の研究者が参加する壮大なプロジェクトの全貌に聞き入っていました。

続いて「鶴屋南北作歌舞伎と『今古奇観』—『お染久松色読販』の騙る女—」をテーマに講義を行った山下教授は、文化10(1813)年初演の鶴屋南北作歌舞伎『お染久松色読販』を取り上げ、中国白話小説『今古奇観』から影響を受けている、女方が騙るをする部分に着目し、『今古奇観』が利用された背景について、平賀源内や森島中良と南北や歌舞伎役者尾上松助との交流が影響を与えた可能性について多くの画像を用いて論証されました。冒頭には歌舞伎の歴史についての解説もあり、聴講者からは当時の人物交流や歌舞伎における女方の演技の特徴についての質問が寄せられ、興味深そうに聞き入る様子が見られました。

講義終了後、大友教授は「資料をじっくり見て研究すること、腰を据えた研究が期待されるのではないかと」研究生活を振り返り、山下教授は「若いころの苦労は、50歳以上の人生に備えるための財産」「研究がうまく進まないときは、運動して心を穏やかに整えて下さい」と語りかけるなど、両教授から院生たちへ激励の言葉が贈られました。

今回は館内外や海外からも希望があり、60名以上の方に聴講いただきました。大友教授と山下教授から研究指導を受けた修了生も数多く聴講し、画面越しではありましたが、久しぶりに顔を合わせ、和やかな雰囲気にもまれ、両先生の最終講義を終えることができました。



特別講義での記念撮影（一部抜粋）
最上段左：山下則子教授、最上段右：大友一雄教授

花上和広さん、木戸雄一さんが学位取得

3月24日(水)、令和2年度春季学位記授与式が行われ、花上和広さんと木戸雄一さんに博士(文学)の学位が授与されました。おめでとうございます。お二人からの言葉を紹介します。

○花上和広さん(課程博士)

指導してくださった神作研一教授・海野圭介教授・齋藤真麻理教授はじめ、諸先生方、事務の方々、そして部屋を同じにする院生の学友たち、みなさんに守られて、何とか修了することができました。この場をかりて御礼申し上げます。大変にありがとうございました。

定年退職後からの入学でしたが、今思うことは国文研にきて本当によかったということです。人間関係にも恵まれ、自由にゆったりと時間を過ごせたと感じます。いつでも手元に資料があるという安心感がありました。また使い勝手の良さは本当に有り難いことでした。

最後に私事になりますが、学部卒業以来ずっと指導してくださった恩師久保木哲夫先生、また、くじけそうになった時、いつも励ましてくれた母に感謝の言葉をささげたいです。

○木戸雄一さん(論文博士)

際限の無い自分の研究領域に、ようやく最初の礎石を置いたという気がしている。地方の蔵書を開くと、すぐにそれらが文学史などとはかけ離れた「文学」の集まりであることに気づく。特に「文章回覧誌」は文学研究からも歴史研究からも見捨てられた史料だった。次々に史料を発掘する中で、立ち止まるきっかけを見出せないままここまで来た。前年から取り組んでいたとはいえ、結局は疫病による旅の中止がこの学位論文を形にしたようなものである。この流行が終息するまでにさらに大きな構図を描いてみたい。そして終わればまた旅に出たい。

当館データベースのご案内

当館ウェブサイトの「電子資料館」では、日本文学のみならず色々な分野の古典籍画像をダウンロードできる新日本古典籍総合データベースなど、様々なデータベースを公開しています。また、「古典籍画像を使う」では、WEB 会議などで使える背景画像を紹介しているなど、様々なコンテンツを用意しています。ぜひご活用ください。

- ▶ 電子資料館 <https://www.nijl.ac.jp/search-find/#database>
- ▶ 古典籍画像を使う <https://www.nijl.ac.jp/koten/image/>



当館 Twitter、Facebook、YouTube チャンネルのご案内

当館 Twitter や Facebook では、イベント情報やデータベース、基幹研究のことなどをタイムリーに発信しています。また、YouTube チャンネルでは先の特別展示「ないじえる芸術 共創ラボ展 時の束を抜くー古典籍からうまれるアートと翻訳ー」のバーチャルギャラリーツアーなどを公開しています。ぜひ、チャンネル登録をお願いします。



表紙絵資料紹介

『詩文』〔江戸前期〕写。1巻、縦29×全長734cm。井上文庫。

本書は、肥前鹿島藩主であった鍋島直條(1655-1705)に関わる詩文を集めて卷子本に仕立てたものである。直條を含め、十人の作品が収められており、文学をとおした交流を知る上で大変貴重な資料である。十人の中には、林鳳岡(1644-1732)・人見竹洞(1638-96)など林家の一門、梅嶺道雪(1641-1717)・桂巖明幢(1627-1710)などの黄檗僧、そしてあまり知られることのなかった何心声(1627-86)という長崎で唐通事(通訳)をしていた人物が含まれている。掲出したものは、黄檗僧格峰実外(1652-1715)が直條に贈った七言律詩である。格峰実外は直條の実の兄で、病弱のため後継の地位を弟に譲って出家した。文中に見える「楓園」とは、鹿島藩江戸藩邸にあった庭園の名であり、直條の別号でもあった。

本書はもう一点、多色摺りの詩箋が多用されていることでも注目される。掲出のものは銀杏にとまった鳥を描くものであるが、他に蓮にコウノトリ、樹下に白象などの図がある。コウノトリと白象には「空摺」といって、色を用いず紙に凹凸を付けて表現する高度な技法が用いられている。これらの詩箋は中国から輸入されたもので、後に日本での木版多色摺りの浮世絵に多大な影響を与えた。

本書を含め肥前鹿島藩に関わる貴重資料は井上敏幸氏から当館が譲り受け、井上文庫として保管しているものである。

(入口 敦志)

★参考 中尾友香梨・井上敏幸著『文人名鍋島直條の詩箋巻』
(2014年、佐賀大学地域学歴史文化研究センター)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.59

発行日 令和3(2021)年6月21日

編集 国文学研究資料館 企画広報室

製作 株式会社 アズディップ

©人間文化研究機構国文学研究資料館